

- 1 去年今年心臓といふ泉あり
- 2 破魔弓や我に向かひて波来る
- 3 貝殻のやうな耳ありひめ始め
- 4 春着着て土鳩の餌をひと掴み
- 5 ラガー等の吹き曝しなる魂よ
- 6 あかぎれの手がトランプを掻き回す
- 7 森に入るやうに本屋へ雪催
- 8 恋猫の目をこすりゐる葬の家
- 9 踏まれても踏まれても犬ふぐりかな
- 10 蒼天は果てなき未来つくしんぼ
- 11 春風を飲み干すやうに笑ひけり
- 12 陽炎となるまで海を見てをりぬ
- 13 よなぐもり拷問具めく千歯扱き
- 14 血の足らぬ日なり椿を見に行かむ
- 15 肩触るる距離落椿踏まぬやう
- 16 土筆煮て化粧の仕方忘れけり
- 17 へなへたと空崩れたるいかのぼり
- 18 東京は玻璃の揺りかご花辛夷
- 19 蝶遊ぶ壊れつつけるこの国に
- 20 花満ちて死者に無限の夜のありぬ
- 21 あかときの夢の断片蝌蚪の紐
- 22 ハーモニカ青柳の街膨らます
- 23 刃物屋の薄暗がりのヒヤシンス
- 24 ポタージュの重き確かむ花の夜
- 25 遠足の子を青空へ解き放つ
- 26 桜より淡し魚のソーセージ
- 27 石のこゑ木のこゑ蝌蚪の生まるらむ
- 28 懲り懲りと言ひて子猫を持ち帰る
- 29 磯遊び皆ペンギンに見えてきし
- 30 木更津は大き月あげ酔蛤
- 31 浅蜷汁星の触れ合ふ音立てて
- 32 枝垂桜音なき雨の紡がるる
- 33 泣くことを日課としたる馬酔木かな
- 34 始まりは爪弾くやうに夕蛙
- 35 今日はまだ寝ませうヒヤシンスに筆
- 36 次ページへ続く青春芝桜
- 37 菖蒲田の合戦絵巻広がれり
- 38 黒牡丹城の系図に狐妻
- 39 揺れ合うて噂話の罌粟の花
- 40 ひそひそとどくだみ殖ゆる夜なりけり
- 41 かはほりや鎖骨に闇の落ちてくる
- 42 食ひ足りて墓となる夢見てをりぬ
- 43 東京の人は土買ふ蜥蜴飼ふ
- 44 遣唐使の海を遙かに濃紫陽花
- 45 祖母の魂いま雲となり夏蚕村
- 46 岩と化す木よ山椒魚眠らせて
- 47 土俵入りの貌して墓の歩み出す
- 48 通りやんせ蛍袋に夜の来る
- 49 ほうたるや米磨がぬ日は子に戻り
- 50 マリアにはなれず紫陽花揺らしたる

75 74 73 72 71 70 69 68 67 66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51
蚊に刺されたる膝裏のまだ若き
短夜の隙間だらけのクロワッサン
卵焼うつすらと焦げ梅雨明くる
異国語は早口四万六千日
洗ひ髪一升酒を抱へ来る
触るるもの欲しき指先星涼し
緋鯉ゆく恋の勝者とならむため
噴水に放り出さるる水のこゑ
鏡見るやうに向日葵覗きたる
百日紅谷戸の暮らしは窓開けて
峰雲や握りつぶせば小さきパン
夏休み足ばらばらに亀泳ぐ
ラムネ飲む人魚のみない水族館
ロボットのやうな顔して蟬死せり
一湾を沸騰させてはたた神
橋涼み女は過去を言ひたがる
潮騒や氷菓の痛み分かち合ふ
猿の檻人間の檻夏終はる
よそ者として草むらに花火待つ
踊る人みな父母に見えてきし
数学の先生笑はずに踊る
ざりがにの腹白きこと終戦忌
包丁の刃毀れを撫で厄日来る
鶏頭や嫁を太らす女系村
指示語しか言はぬ父なり吾亦紅

100 99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76
とんび舞ふ秋天といふ大き穴
遠き帆のささやき合うて秋彼岸
泣くやうに溺るるやうに桃食ひぬ
曼珠沙華違ふ夢見て寄り合ひぬ
秋の蠅へアスプレーに酔ひたるか
壊れたるテレビとちちろ暮らしけり
隠れ家に木犀の香のなだれ込む
栗虫を太らせ借家暮らしかな
山姥の歯型の残る烏瓜
鬼ごつごみみたいな恋や秋祭
あひづちを少し変へたる野紺かな
きのこみな宙から降つてきたやうな
猪が来てゐる音楽の時間
生ゴミの魚と目の合ふ夜寒かな
仏でも神でもなくて鹿火屋守
口開けて魚の干さるる神の留守
天孫の古墳と信じ大根干す
煮大根家は壁から老いにけり
エプロンは女の鎧北風
猫顔と言はれ焼諸食うてをり
着ぶくれて遊女になつてみたき夜
身請け待つごと朱を灯し冬の鯉
討入りの日なり醤油の黒光り
息白く星を読みをる獵師の子
大仏の尻より年の暮れにけり